

第4学年 算数科学習指導案

男子17名 女子13名 計30名

指導者

ばっちりコース 小 原 和 博
しっかりコース 中出口 知 香
ゆっくりコース 深 水 智 子

1 題 材 2けたでわるわり算

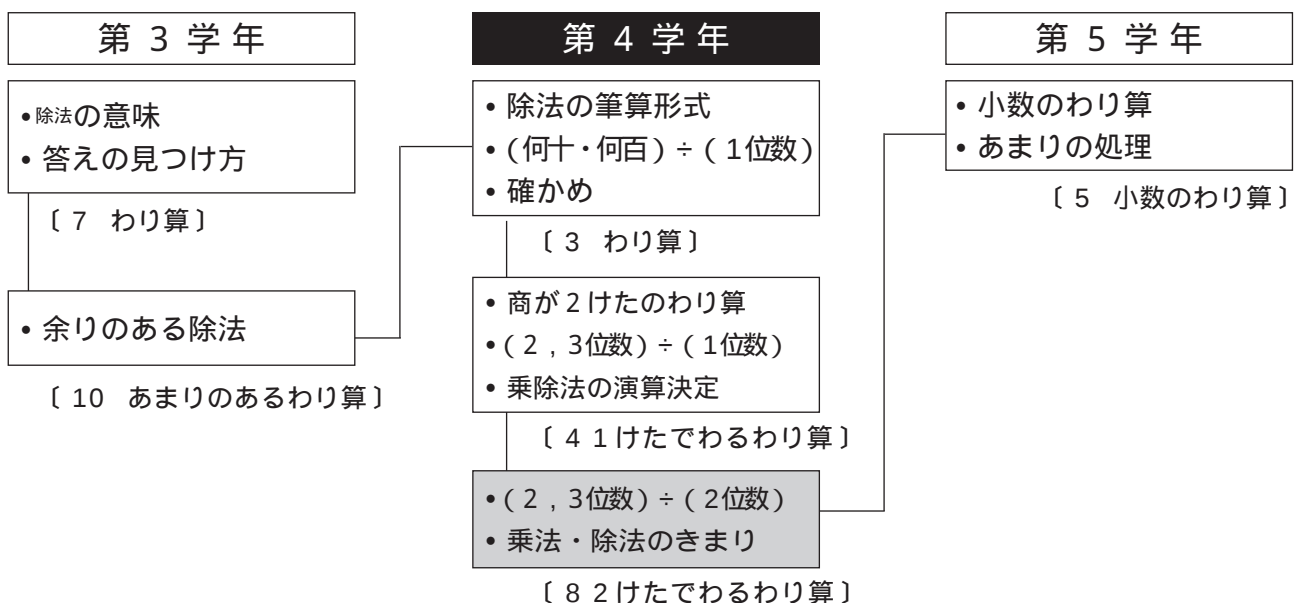
2 題材について

これまでに子どもたちは、数量を等分したときにできる1つ分の大きさを求めたり、ある数量をいくつかずつ同じように分け、いくつ分あるかを求めたりする活動を通して、除法が用いられる場面や除法の意味を明らかにしてきている。また、1位数の場合について被除数を10や100のまとまりのいくつ分として考え、乗法九九を適用しながら計算してきており、除法も位ごとに分けて計算すればよいという見方にまで高まっている。

そこで、本題材では、除数が2位数の除法まで範囲を広げ、その場合にも被除数や除数を10や100のまとまりとして考え、乗法九九を適用しながら考えていく。また、数を相対的に見る見方を培い、数範囲が広がっても同じように計算できる見方をねらいとしている。

このねらいを達成するために、まず、(何十何)÷(何十何)の問題を提示し、追求させることにする。このことで(何十)÷(何十)の商の求め方に着目し、子ども自らが学習の必要感をもちながら、除法の性質や被除数と除数の関係、及び除数が2位数の除法の計算の方法まで質問を深め、取り組んでいけるようにする。さらに、被除数が3桁になっても、10や100のまとまりで考えていくと、これまでと同じように計算できるのではないかという疑問をもたせながら、3位数÷2位数の除法を考えさせていきたい。この疑問を解決していく過程で、子どもたちは、除数をおよそ何十として仮商を立てて考えていくよさや被除数や除数を10や100のまとまりとして考えると、何十でわる除法に置き換えられ、かけ算九九を用いて商を見積もることができるという既習の学習内容が活用できるよさを味わっていくものと考えられる。

ここでの学習で培われた数を相対的に見る見方や乗法の性質に関する考え方は、小数や分数を整数と同じ数として統合化を図る学習へと発展していくものである。



3 子どもの実態（調査人数 28 / 29人）

（1）本題材を支える基礎学力の実態（既習事項）

【調査1】

設問	ね ら い	問 題	正答	誤答	無答	誤 答 傾 向
1	● 暗算で除法ができる。	$350 \div 7$ $64 \div 2$	23	5	0	・10のまとまりや64を60と4に分けて考えることができない。
2	① 2位数÷1位数で商が2位数の除法ができる。	$3 \overline{)8}$	26	2	0	・7が3でわり切れないところでつまづいている。
	② 初めの位に商が立ない除法ができる。	$3 \overline{)49}$	26	2	0	・商の立つ位が違う。
	③ 商が3位数で、十位に0の立つ除法ができる。	$7 \overline{)743}$	24	4	0	・十の位に0を書いていない。
	④ 商が2位数で、一位に0の立つ除法ができる。	$9 \overline{)25}$	23	3	2	・一の位に0を書いていない。
3	● 余りのない包含除問題を解くことができる。	えんぴつが72本あります。1人に6本ずつ配ると、何人に分けられるか。	20	5	3	・問題場面を絵図や数直線に表すことができない。
4	● 余りのある包含除問題を解くことができる。	89メートルの長さの縄があります。これから、7メートルの長さの縄が何本取れて、何メートル余るか。	18	3	7	・問題場面を絵図や数直線に表すことができない。
5	● 余りのある等分除問題を解くことができる。	つるを折るために、折り紙を914枚準備しました。7班で同じ数ずつ分けようと思います。1班何枚で、何枚余るでしょうか。	16	5	7	・問題場面を絵図や数直線に表すことができない。

（2）本題材に関する基礎・基本の実態（未習事項）

【調査2】

設問	ね ら い	問 題	正答	誤答	無答	誤 答 傾 向
1	【表】除数が2位数の計算ができる。	① $90 \div 30$	4	13	11	・十の位同士をわっている。
		② $62 \div 13$	2	0	27	
		③ $73 \div 24$	2	0	27	
		④ $924 \div 37$	0	0	29	
		⑤ $607 \div 38$	0	0	29	
		⑥ $900 \div 16$	0	0	29	
2	【知】除法の筆算のやり方が理解できる。	① $\begin{array}{r} 7 \\ 61 \overline{)426} \\ \underline{427} \\ 1 \end{array}$	2	0	27	

		②	$\begin{array}{r} 40 \overline{) 180} \\ \underline{40} \\ 40 \\ \underline{40} \\ 0 \end{array}$	2	0	2 7	
3	【知】筆算の仕組みが分かる。	①	$\begin{array}{r} 67 \overline{) 6 \square 4} \end{array}$	0	0	2 9	
		②	$\begin{array}{r} 3 \square \overline{) 349} \end{array}$	0	0	2 9	
4	【知】除法の式を使って問題を解くことができる。	学級の35人分の遠足のお金が875円残りました。1人に何円ずつ返せばよいでしょうか。		0	0	2 9	

【調査1】から

- 本題材を支える既習事項について、計算技能はおおむね定着していると考えられる。しかし、2年生内容の乗法九九や3年生内容の乗法の筆算形式、除法の意味や答えの見付け方などにつまずきが見られる子どもがいる。
- 既習内容の定着状況に大きな個人差が見られる。問題に主体的に取り組む子どもと、教師が付いて一緒に問題を読むことで、取り組む子どももいる。そのため、自分で絵図に表し問題場面を把握する力にも個人差がある。
- わり算の題材であるため、2つの数字を並べて式を立てている子どもが多い。そのため、問題場面を絵図や数直線で表し、文章を式に記号化することができない。これは、読み、書きといった言語に関わる部分につまずきが多いと考えられる。

【調査2】から

- 本題材に関する未習事項について、①から $90 \div 30$ を計算する場合、10のまとまりを意識せずに計算の手順のみで考える子どもが多い。そのため、計算技能をすでに身に付けている子どもは正答しているが、身に付けていない子どもは無答である。
- 10のまとまりを意識するように声かけをしても、図や数直線を用いて考える子どもはいなかった。これは、問題場面を図や数直線に表して考える力が育っていないと考えられる。
- 正答の出せなかった子どものほとんどが、筆算のみで計算しており、 $90 \div 30 = 30$ となっている子どもが13名いた。この子どもたちは、加法や減法と同じように考え、同じ位同士を計算しているものと考えられる。

4 題材の指導上の留意点

以上のようなことをふまえ、子どもたちが主体的に学習に取り組み、基礎・基本が確実に定着するように、本題材は理解や習熟の程度に応じてコース分けをすることにした。例えば、数人のグループで協力しながら学習を進めるコースや教師に質問しながら学習を進めるコースを設定する。どのコースにおいても、次の4点に留意したい。

- (1) 2位数でわる除法場面を捉えさせるために、まず、(何十何) $\div$ (何十何) の等分除から導入し、(何十) $\div$ (何十) の除法と関連づけて考えさせていく。
- (2) 単に筆算形式などの計算技能だけを身に付けさせるのではなく、除数が2位数の除法の意味を理解させるために、図や計算のきまりなど自分なりの方法を駆使して解決させていくようにする。
- (3) 子どもたちを学び合わせるために、10のまとまりに着目している子どもや図や数直線などを使って具体的に考えている子どもの考えを取り上げ、友だちの考えと関連づけながら説明させていく。
- (4) 見方・考え方を深め、広げさせるために、既習の学習内容や友だちの考えをどのように結びつけて考えていったか自分の学び方を振り返らせるとともに、次に学習したいことを考えさせるようにする。
- (5) 最後に、様々な練習問題を通して、本題材で学習したことを振り返り、数を相対的に見たり、学習内容を統合したりしながら、除法を考察する力を高めることができる時間を設定する。そこで、練習問題をした結果を自己診断したり、これまでの自己評価カードを振り返ったりして、再学習や基本問題、発展問題を選択し、意図的、計画的に繰り返し学習し、考えたり、活用したりしながら学習を進めることができるようにする。特に、計算技能の繰り返し学習や文章問題を絵図に表して問題場面を把握し式化する時間を十分に確保するようにしたい。

5 指導と評価の計画（全15時間）

(1) 題材の目標

- 除法の問題解決に意欲的に取り組む中で，絵図や数直線を使って除法の意味や計算の仕方を自分なりに考え，除数が2位数になっても1位数の除法と同じように計算できることに気付き，正しく計算することができる。

(2) 題材の評価規準

- 除数が2位数の除法に関心をもち，10のまとまりをつくって，乗法九九を使って計算をしたり，計算の仕方や除法の性質を考えたりする活動に意欲的に取り組もうとする。
(関心・意欲・態度)
- 単位の考えや統合的な考え方でこれまでの整数の除法を統合して考えいくことができる。
(数学的な考え方)
- $(23\text{位数}) \div (2\text{位数})$ の商を絵や図，乗法九九等を用いた自分なりの解決方法で求めたり，筆算の仕組みや手順を自分なりの言葉で説明したりすることができる。
(表現・処理)
- $(23\text{位数}) \div (2\text{位数})$ の筆算の仕方が分かり，筆算で商を求めることができる。
(知識・理解)

は基礎学力を重視した時間

小 題 材	時 間	形 態	主 な 学 習 活 動	評 価 の 観 点				の 具 体 的 内 容
				関 意	数 考	技 表	知 理	
1 2 けた で わ る わ り 算 1	1	習 熟	● 等分除と包含除の場面を取り上げ，2桁の数でわる除法の意味を考える。 ● $80 \div 20$ の商は，10を単位として考えると $8 \div 2$ で求められることを知る。					【関】進んで操作活動をしたり，既習の見方・考え方をういたりして，商を求めようとする。
	2	習 熟	● $84 \div 21$ で商の立て方を考える。 ● $(2\text{位数}) \div (2\text{位数})$ の筆算の手順を考える。					【表】除数と被除数をおよその数でとらえて仮商を立て，筆算の手順を正しく行うことができる。
	3	習 熟	● $96 \div 33$ で商の立て方を考える。 ● 仮商が大きすぎた場合の修正のしかたを考える。 ● 商の正しさを確かめることにより，除法について成り立つ関係を知る。 ● 仮商が大きすぎて，修正してもまだ大きい場合の修正のしかたを考える。					【知】仮商を修正し，正しい商を求める手順がわかる。
	4	習 熟	● $(3\text{位数}) \div (2\text{位数})$ で，商が1位数になる場合の筆算のしかたを考える。					【考】既習の除法の筆算のしかたを被除数の桁数が多くなった場合にも利用することができる。

	5	習熟	● (3 位数) ÷ (2 位数) で , 仮商が 1 0 になりそうな筆算のしかたを考える。 ● (3 位数) ÷ (2 位数) の筆算の手順をまとめる。					【表】適切な仮商を立てたり , 確実に仮商を修正したりしながら , 正確に除法の計算ができる。
練習問題	6	習熟	● 除数が 2 位数の除法の練習をし , 筆算の手順を考える。 ● 除数が 2 位数の問題を解く。		○	○	○	【考】【表】【知】 既習事項がおおむね定着している。
2 2 けたでわるわり算 2	7 本時	習熟	● (3 位数) ÷ (2 位数) の商の立つ位置を考える。 ● 商を 2 回立てる筆算の手順を考える。					【考】操作を通して , 商が十の位に立つ筆算の仕方を考える。
	8	習熟	● (3 位数) ÷ (2 位数) の商の立つ位置を考え , 筆算の手順を考える。					【知】商が 2 位数になっても , 仮商を立てる位置や除法の手順は変わらないことがわかる。
	9	習熟	● 商の一の位が空位になる場合の筆算の順序を考える。					【表】商に 0 がつ立つ筆算も , 同じ考え方や手順で正しく計算できる。
3 わり算やかけ算のきまり	10	習熟	● $120 \div 40 = 3$ で , 商が 3 になる式を 6 こ考える。 ● 商が等しくなる場合の除法のきまりを考える。					【考】被除数と除数を同じ数でわっても , 同じ数をかけても , 商は変わらないという除法のきまりを考えることができる。
	11	習熟	● かけ算での被乗数と乗数と積の関係 , わり算での被除数と除数と商の関係を考えきまりを見つける。					【関】かけ算とわり算でのいろいろなきまりを意欲的に見つけようとする。
まとめ	12	習	● 除数が 2 位数になる場合の除法のしかたを確かめる。 ● いろいろな国のわり算のしかたを考える。		○	○	○	【考】【表】【知】 既習事項がおおむね定着している。
	13	熟						
チャレンジ	14	習熟	● 虫食い算を解いたり , 作ったりしながら , 除法の筆算の手順を確かめる。					【関】除法の虫食い算を解いたり , 作ったりしながら , 除法の筆算の手順を確かめる。
テスト	15	一斉	● 題材のまとめのペーパーテストをする。		○	○	○	【考】【表】【知】 ペーパーテストを実施する。

6 本時『ばっちり』コース(7/15)

(1) 目標

- 商を求めるために絵図で考えたり，計算したりする活動を通して， $(3 \text{ 位数}) \div (2 \text{ 位数}) = (2 \text{ 位数})$ の筆算の仕方を考える。

(2) 評価規準

- 操作を通して，商が十の位に立つことを考えることができる。
〔十分満足と判断される状況〕
- ・ 操作を通して，被除数が大きくなっても，仮の商を立てる位置や除法の手順は変わらないことに気付き，商が十の位に立つことを考え，具体物を取り入れながら自分なりの言葉で説明することができたか。
〔努力を要する子どもへの手立て〕
- ・ 操作を通して，2桁の数でわる計算では，わられる数の上から2桁がわる数と等しいか，わる数よりも大きいとき，商は上から2桁目から立つということにきづくことができるようにする。

(3) 基礎・基本の確実な定着に向けて

前時までに，10より大きい数が仮の商として立つときには9を仮の商とするような「仮の商」のを見つけ方とその修正の仕方を中心に指導してきた。しかし，ここでは，9を仮の商として立てても，余りの方が除数よりも大きくなることから，除数が2位数であれば，被除数も上から2桁の数を見て，商の立つ位を決めることを指導したい。つまり，除数が2位数であれば，被除数の上から2桁の数を分けることができるかどうか，分けなければ，さらに1つ下の単位に崩して分けるという見方を育てていきたい。

この考え方は，除法の筆算で指導してきた「単位ごとに分け，分けられないときには下の単位に崩して分ける」という考え方と同じであることから，絵や図，これまでの筆算の手順を活用して，2桁の数の除法であっても，仮の商を立てる位置や除法の手順は同じになっていることに気づき，自分なりの言葉で説明することができるようにする。

(4) 実 際

過 程	主 な 学 習 活 動	時 間	教 師 の 具 体 的 な 働 き かけ
つ か む	1 前時を振り返る。	10	○ $(3 \text{ 位数}) \div (2 \text{ 位数}) = (1 \text{ 位数})$ のわり算を取り上げ，10のまとまりで考えると計算できることを思い起こさせることで，他の数でも同じように計算できるのだろうかという問題意識を高め，めあてを焦点化することができるようにする。 ○ 絵図等を書いたり，半具体物を操作したりすることで，商が十の位に立つことに気づくことができるようにする。 ○ 100の束を10の束で考えると14人で分けられそうだという見通しをもつことができるようにする。
	2 学習課題を受け止める。		
	折り紙が322枚14人で同じ数ずつ分けると，1人分は何枚になるでしょう。 (1) 立式し既習の計算方法を適用する。 $322 \div 14$ (2) 既習の内容との類似点と相違点を考える。		

かんがえる	3 めあてを立てる。		○ 絵図等を書いたり，半具体物を操作したりすることで，商が十の位に立つことに気づくことができるようにする。 ○ 100の束を10の束で考えると14人で分けられそうだという見通しをもつことができるようにする。 ○ 「なぜ壊すのか」と切り返すことで，100の束のままでは分けられないことに気づくとともに100の束から分けていくよさに気づくことができるようにする。
	4 めあてを解決する。 (1) 各自で考える。		【評】操作を通して，商が十の位に立つことを考えることができたか。
	(2) 筆算の仕方に当てはめる。	20	○ 2桁の数でわる計算では，わられる数の上から2桁がわる数と等しいか，わる数よりも大きいとき，商は上から2桁目から立つというやり方だけで筆算を解いている子どもには，絵や図を使って自分なりの言葉で商が十の位に立つ理由を説明させることで，意味理解を深めることができるようにする。
	5 学習のまとめをする。	5	○ できるだけ子どもの言葉を使ってまとめることで，主体的な問題解決学習のよさを味わうことができる。 ○ 類似問題をするすることで，除数が2位数であれば，被除数も上から2桁の数を見て，商の立つ位を決めるというよさを味わうことができるようにする。 ○ 教科書では，3位数÷2位数=2位数で終了しているが，4位数÷2位数=3位数まで発展的に取り上げることで，4位数の除去であっても，アルゴリズムは同じであることを捉えることができるようにする。
まとめる	商が10よりも大きくなりそうなきには，どうしたらいいだろう。		
ひろげる	6 本時の学習を確認する。 (1) 練習問題を解いて定着を図る。	10	
	(2) 振り返りカードに記入する。		

板書計画

$132 \div 22$ $326 \div 36$	<めあて> 商が10よりも大きくなりそうなきには，どうしたらよいだろう。	<まとめ> 商が10よりも大きくなりそうなきには，10の束で考えて十の位の上に商を立てればよい。
<学習課題> 折り紙が322枚14人で同じ数ずつ分けると，1人分は何枚になるでしょう。 (式) $322 \div 14$	<予想> 32枚よりも多そう。 <解決方法>	<練習問題> 814÷37の計算の仕方を説明しましょう。 9895÷63の計算の仕方を説明しましょう。 6049÷45の計算の仕方を説明しましょう。

7 本時『しっかり』コース(7/15)

(1)目標

- 商を求めるために絵図で考えたり，計算したりする活動を通して， $(3 \text{ 位数}) \div (2 \text{ 位数}) = (2 \text{ 位数})$ の筆算の仕方を考える。

(2)評価規準

- 操作を通して，商が十の位に立つことを考えることができる。
〔十分満足と判断される状況〕
- ・ 操作を通して，被除数が大きくなっても，仮の商を立てる位置や除法の手順は変わらないことに気付き，商が十の位に立つことを考え，具体物を取り入れながら自分なりの言葉で説明することができたか。
〔努力を要する子どもへの手立て〕
- ・ 具体物の操作を繰り返し行い，束を分けたり崩したりする活動を通して商が十の位から立つということに気づくことができるようにする。

(3)基礎・基本の確実な定着に向けて

前時までには，商が一の位から立つ式において「仮の商」の見つけ方とその修正の仕方を中心に指導してきたが，ここでは，除数が2位数であれば，被除数も上から2桁の数を見て，商の立つ位を決めることを指導したい。つまり，除数が2位数であれば，3位数の被除数の百の位と十の位の2桁の数を分けることができるかどうかを判断し，分けられなければ，さらに10の束を1のばらに崩して分けるという見方を育てていきたい。この考え方は，除去の筆算で指導してきた「単位ごとに分け，わけられないときには下の単位に崩して分ける」という考え方と同じであることにも気付かせたい。

また，この小題材では，2桁の数の除去であっても，今までの筆算と同じように，「何の位から」「たてる」「かける」「ひく」「おろす」というアルゴリズムになっていると理解させていくことを大事にしていきたい。

(4)実 際

過程	主 な 学 習 活 動	時間	教師の具体的な働きかけ
つ か む	1 前時を振り返る。 $132 \div 22$ $326 \div 36$	10	○ 既習内容の $326 \div 36$ と本時 $322 \div 14$ を平行して板書することで，どこまでできて，どこからできないのか明確に問題意識を持つことができるようにする。 ○ 絵図等を操作して，前時の解決方法が使えないことを確認する。
	2 学習課題を受け止める。 折り紙が322まいあります。14人で同じ数ずつ分けると，1人分は何枚になるでしょう。 ○ 立式し既習の計算方法を適用する。 $322 \div 14$		

3 めあてを立てる。

商が10よりも大きくなりそうなのは、どうしたらいいだろう。

4 めあてを解決する。

(1) 自分なりの方法で考える。

- 大きな束から分ければよさそうだ。
- 分けられない100の束を10の束にばらしてみよう。



(2) みがきあう。

- 100の束は分けられなかったよ。
- 1のばらにして分けるとすごく大変だ。
- 100の束を10の束にしたら、10の束が分けられたよ。
- 筆算で計算できないのかな。



(3) 筆算の仕方に当てはめる。

- 十の束から分けられたから、商は十の位から立つのかな。
- 1けたでわるわり算と同じやり方だね。
- およその数で仮の商を求めてから計算しよう。



5 学習のまとめをする。

10の束で考えて、10の束で余ったものは、1のバラに崩してさらに分ければよい。

6 本時の学習を確認する。

- 練習問題を解いて定着を図る。
- 振り返りカードに記入する。

20

5

10

- できるだけ子どもたちの言葉でめあてをたてることで、仮の商が10よりも大きくなるときにはどうすればよいかを意識することができるようにする。
 - 絵図等を書いたり、半具体物を操作したりすることで、商が十の位に立つことに気づくことができるようにする。
 - 実際に、具体物を取り入れながら、100の束を10の束で考えると14人で分けられそうだという見通しをもつことができるようにする。
 - 「なぜ崩すのか」と切り返すことで、100の束のままでは分けられないことに気づくとともに100の束から分けていくよさに気づくことができるようにする。
- 【評】操作を通して、商が十の位に立つことを考えることができたか。

- 被除数を隠し、百の位から純に見せていくことで、どの位から商が立つのかを決められるということに気付くことができるようにする。

- できるだけ子どもたちの言葉を使ってまとめることで、主体的な問題解決のよさを味わうことができるようにする。
- 類似問題をするすることで、除数が2位数であれば、被除数も上から2桁の数を見て、商の立つ位を決めるというよさを味わうことができるようにする。

- 本時の学習を振り返ることで、数が大きくなっても10のまとまりに着目して、商を見積もろうとする意識を高め、次時の学習につなぐことができるようにする。

板書計画

<学習課題>

折り紙が322枚あります。
14人で同じ数ずつ分けると、
1人分は何枚になるでしょう。

(式) $322 \div 14$
図で考える。

<めあて>

商が10よりも大きくなりそう
なときにはどうすればいいか考
えよう。

筆算のしかた

$$\begin{array}{r} 23 \\ 14 \overline{) 322} \\ \underline{28} \\ 42 \\ \underline{42} \\ 0 \end{array}$$

- ① 何の位から
- ② たてる
- ③ かける
- ④ ひく
- ⑤ おろす
- ⑥ たてる
- ⑦ かける
- ⑧ ひく

<まとめ>

10の束で考えて10の束であま
ったものは1のバラにくずして分
ければよい。

<練習問題>

8 本時『ゆっくり』コース(7/15)

(1) 目標

- 商を求めるために絵図で考えたり，計算したりする活動を通して， $(3 \text{ 位数}) \div (2 \text{ 位数}) = (2 \text{ 位数})$ の筆算の仕方を考える。

(2) 評価規準

- 操作を通して，商が十の位に立つことを考えることができる。
〔十分満足と判断される状況〕
 - 操作を通して，被除数が大きくなっても，仮の商を立てる位置や除法の手順は変わらないことに気付き，商が十の位に立つことを考え，具体物を取り入れながら自分なりの言葉で説明することができる。
〔努力を要する子どもへの手立て〕
 - 実際に具体物を操作して，ブロックと数字とを並べて考えることで，計算のしかたの見通しをもつようする。

(3) 基礎・基本の確実な定着に向けて

前時までに，「同じ数ずつ分ける」という操作をすることにより，「わる」ということを具体的に理解することができるようにし，仮商の立て方も操作を通して指導してきた。ここでも，分けるという操作を行い「わる」ということの理解を深めていきたい。また，百のたばや分けることからはじめ，分けられなければ1つ下の単位に崩して分けるという見方を育てていきたい。「具体物」「半具体物」「数字」へと一般化して操作したことが結び付くようにして商が何の位から立つかを考えさせていきたい。

操作活動を十分に行い，商を求めてから筆算のしくみや意味についても考えるようにし「何の位から」「立てる」「かける」「ひく」「おろす」というアルゴリズムのもつよさを味わわせるようにしていきたい。

(4) 実 際

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働きかけ
つ か む	1 学習課題を受け止める。。 折り紙が322枚あります。14人で同じ数ずつ分けます。1人分は何枚になるでしょう。 立式する。 $322 \div 14$	10	- 絵を提示して問題をつくることでどんなときにわり算を使うのか問題意識を持つことができるようにする。 - 同じ数ずつ分けるに線を引き，等分除が用いられる場面を感じとれるようにする。
	2 めあてを立てる。 $322 \div 14$ の計算の仕方を考えよう。		子どもたちの分かりやすい言葉でめあてを立てることで，どのように解決すればよいかを意識できるようにする。
	3 めあてを解決する。		具体物を操作し，崩すときはノートに記

(1) 実際に分けてみる。



百の束。
あれ？わけられないなあ。

十の束に崩せばいい。



十の束もあまるからさっき
とおなじように1こずつば
らしてみよう。



(2) 筆算の仕方にあてはめる。

十の束で分けられたから十
の位から商が立つね。



4 学習のまとめをする。

10のたばから先に分け、分けられない
ときは1つ下の単位にくずしてわければ
よい。

5 本時の学習を確認する。

(1) 練習問題をする。

$$\cdot 384 \div 12 =$$

(2) 振り返りカードに記入する。

25

3

7

○ 具体物を操作し、崩すときはノートに記録するようにする。なぜ、崩すのか問いかけることで、100の束では分けられないことに気付くとともに崩して分けていくよさに気付くとともに崩して分けていくよさに気付くことができるようにする。

○ 1つ下の位に崩すという考えがでた子どもは、自力でやってみるように声をかけ、商が出たときは絵図や計算で考えるようにする。

○ 友だちに教えることによって自分の考えに自信を持つことができるようにする。

【評】操作を通して、商が十の位に立つことを考えることができたか。

○ 商をすぐにかくのではなく、操作活動を想起させながら筆算の仕方を考えさせるようにする。

○ 数字とブロックを並べて板書し、操作したことを想起しやすいようにする。

○ できるだけ子どもたちの言葉を使ってまとめることで、主体的な問題解決のよさを味わうことができるようにする。

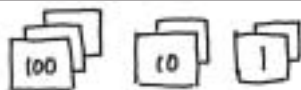
○ 他の問題でも商の立つ位について考え定着をはかる。

○ 本時の学習を振り返ることで、分かったことやがんばったことを賞賛し次時の学習につなぐことができるようにする。

板書計画

<学習課題>

折り紙が322枚あります。
14人で同じ数ずつ分けます。
1人分は何枚になるでしょう。



14人

$$(式) 322 \div 14$$

答え 23枚

<めあて>

322 ÷ 14の計算の仕方を考えよう。

$$\begin{array}{r} 23 \\ 14 \overline{) 322} \\ \underline{28} \\ 42 \\ \underline{42} \\ 0 \end{array}$$

何の位から

$$\begin{array}{r} 23 \\ 14 \overline{) 322} \\ \underline{28} \\ 42 \\ \underline{42} \\ 0 \end{array}$$

立てる
かける
ひく
おろす
立てる
かける
ひく

<まとめ>

10の束から先に分け、分けられないときは1つ下の単位にくずして分ければよい。